

圧倒的な仮説と検証――

時空を超えた先史文明への旅。

その途次、わたしたちは、

思いもかけず、

自らのアイデンティティと遭遇する。

序文

2002年に徳間書店から出版された『謎多き惑星地球』の上下刊は、私が物書きの世界にデビューするきっかけとなった本である。また、エジプト、ペルー、グアテマラ、メキシコなど世界各地の遺跡を丹念に探索して書き上げた労作であるだけに、処女作の『人間死んだらどうなるの』（中央アート出版社刊）と同様、私にとっては大変愛着のある作品でもあった。

しかし、しばらく在庫切れの状態が続いていたため、改めて再出版して頂けるようヒカルランド社の石井健資社長に依頼していたところ、このたび念願が叶い大変うれしく思っているところである。

出版からすでに13年の歳月が経過したというのに、世界各地に残された謎の遺跡や不思議な発掘物（オーパーツ）などの解明は、手つかずのまま今日に至っている。エジプトの三大ピラミッドは4500年前のクフ王一族の建造物であり、ペルーのアンデス山中に残されたマチュピチュ遺跡は5000年前のインカ帝国時代の都市跡、ナスカの地上絵もまた、2000年前にナスカ人によって

作られた遺構とされたままである。

本書をお読み頂ければ、そうした学者の主張が歴史の真実からはほど遠い、虚偽と思ひ込みの産物であることがお分かりになられるはずだ。しかし、私のようなアマチュア研究家の主張は一切無視され、残念ながら真実は今もなお、厚いペールの下に隠蔽されたまま今日に至っている。

体制派学者がいかに真実の発見から身を退いているかは、ナスカの地上絵の近くにあるオクカヘ砂漠から発見された「イカの線刻石」(カブレラストーン)の調査・研究に、彼らに関わろうとしないことを見れば明らかである。

線刻石には恐竜と人類が共存したことを示す恐竜狩りの絵や脳の手術や、心臓摘出手術などの驚異的な絵が描かれており、我々が学校で教えられてきた人類の歴史が誤りであったことを明らかにしている。

これらの線刻石が人類の遠い祖先によって作られたことは、ペルー工科大学鉱業研究所やボン大
学鉱物学・岩石研究所の研究者たちによって、その製作年代が少なくとも1万2000年以上前のものであるという鑑定結果が出たことを見れば明らかである。

しかし、ペルーの学会を牛耳ってきた体制派学者たちは自分の地位の安泰を願うがため、「人間が恐竜と共存するはずがない」の一言でそれらの石を偽物扱いし、2つの研究所の鑑定結果を無視しつづけたまま、今日に至っているのである。興味のおありの方は『イカの線刻石』(ヒカルラ
ド刊)を呼んで頂きたい。

エジプトのギザの大ピラミッド建造の真実についても、体制派学者が真実から目をそらし続けて今日に至っていることはご承知の通りである。我々が学校で教えられてきた最初の文明より遙か以前、重力コントローラーという我々の知らないテクノロジーを使って建造されたものであるのにもかかわらず、学者たちはかたくなに従来からの定説にこだわり続けている。本書を読まれば、「ピラミッド建造者「クフ王」説を裏付ける証拠はたった一つしかなく、それは、「重量軽減の間」の天井裏に描かれたカルトーシユ（名前を囲む輪）とクフ王の名前だけであることが分かる。ところが、その唯一の証拠物が、実は発見者であるハワード・ヴァイス自身がペンキで描いた偽物であったことを示す事実が明らかとなっているのである。

大事なことなので、それについて簡単に触れておくことにする。

英国空軍の大佐であった富豪のハワード・ヴァイスがピラミッドの秘密を解き明かして見せると、大見得を切って勇躍エジプトに旅発ったのは今からおよそ165年前。それを知った医師ハンフリー・ブリューワーはその後を追ってエジプトに渡り、ヴァイス探検隊の診療所長を担うことになった。

実はそのブリューワーが、クフ王のカルトーシユ発見という歴史的な出来事が行われる前の晩に、ヴァイスがヒルという男を連れて赤ペンキと筆を手にはピラミッドに入るところを目撃していたのである。つまり「大ピラミッド「クフ王建造説」の根拠となっているカルトーシユに囲まれたクフ王の名前は、ヴァイスの手で書かれたものであったのだ。

ブリュワーは目撃直後にヴァイスから免職させられ、しばらくエジプトにとどまったあと英国に帰ることとなるのだが、彼が帰国した時にはすでに英国においてクフ王建造説が広く知れ渡ってしまっており、ブリュワーの目撃談は人々に受け入れられることはなかったのである。

ブリュワーは目撃した事実をエジプトから家族のもとに手紙で伝えており、彼の死後、それは家族に語った詳細な目撃談と共にブリュワー家に代々伝えられ、その後、米国に渡った曾孫のウォルター・アレンによって大切に保管されていたのである。

ある日（1983年春）、アレンは地元ペンシルバニア州のピッツパークの新聞に目をやっていたところ、そこには、「大ピラミッドの大嘘！」と題する考古学者・ゼカリア・シッチンの記事が掲載されており、曾祖父が語り伝えていた話に合致する内容、つまりエジプト学者が大ピラミッドの成立年代の根拠としている唯一の「物証」が、実は偽物であったことがシッチンの調査を元に論じられていたのである。

それが縁となって、ヴァイスが書き残した一連の手紙はゼカリア・シッチンの手に渡るところとなり、ヴァイスが名声を得んがために行った許しがたい行為の实体と、それを鵜呑みにした考古学者達の失態が、実に百数十年の歳月を経て白日の下にさらされるといったところであったのである。

しかし、なんとも情けないことであるが、こうした不都合な点については学者は知らぬ存ぜずを押し通し、今日に至るも、一人としてその真実を明らかにしようとする学者が出てきていないのである。これでは、考古学者たちの手によって謎の遺跡や不思議な発掘物の真相が解明されることは、

無理というものである。

本書を書き上げた後からも、私が世にもまれな希有な人物との邂逅が続いてきていることは、読者ならずでにご存じの通りである。その中の一人であるマオリツイオ・カヴァーロー氏やペトル・ホット氏といった宇宙人との交流のある人物からは、我々が忘却の彼方に忘れ去ってしまった先史文明が、色々な形で宇宙人と関わってきていたことを、知らされるところとなった。

それは、『クラリオンからの伝言・超次元スターピープルからの叡智』（徳間書店刊）や『UFO宇宙人アセンション・真実への完全ガイド』（ヒカルランド刊）に記してあるので、詳細はそれぞれの本を読んでもらうことにして、カヴァーロー氏は、宇宙船の中で見せられたオリオン系の宇宙人によるピラミッド建設の様子を『クラリオンからの伝言』の中で、概略次のように語っている。

私（カヴァーロー）はオリオン系宇宙人によってギザ台地に作られた「磁力の檻」と呼ばれる重力や引力から解放された無重力空間に、石切場から切り出された石が次々とテレポーターション（瞬間移動）によって運び込まれる場面を見せられた。そしてこれらの石灰石は、コンピューターシステムによって立体的な映像を描き出す「CADシステム」と同じ原理によって、宇宙人の想念通りの形に積み上げられていった。

建造年代はエジプト文明より遙かに古い太古の時代。建造目的の一つは、地球が宇宙の一大異変に遭遇し磁場を消失しようとしていたため、宇宙からの飛来物をはじめ飛び出す強力な磁力線の発生が必要になったからであった。

彼の語るところが100%真実だと断定することは出来ないが、少なくとも、考古学者が言うところの、スロープ方式と呼ばれる人力でエンヤートットと重い石を運び上げるやり方で、250万個とも300万個とも言われている膨大な数の石を北斗七星を頼りに方位を決め、一つ一つ積み上げたとされる正統派学者が主張する定説よりは、得心がいく話であることだけは確かである。

また、ナスカの地上絵については、ペトル・ホボット氏が大変興味深い話を語ってくれている。それによると、地上絵はナスカ砂漠一帯がエネルギースポットであったことから、地球の内部から吹き出るエネルギーを集中的に集めるために造られたものであるという。巨大な幾何学模様はピラミッドを平面体にしたのと同様の力を持っており、地球が発するエネルギーを集中的に集めることが出来たようである。

その時代は今からおよそ8000年ほど前、あるいはそれ以前で、当時、先史文明の生き残りとしてアンデスやアマゾンに住んでいた先住民のシャーマンたちがヒーリングに利用したものであったようだ。

描かれたハチドリや鯨、猿、コンドルなどの動物たちの絵は先住民たちが受け継いだ家紋で、シャーマンたちはその家紋のブローチを胸につけ、同じナスカの絵をイメージすることによって、アンデスやアマゾンといった遠隔地にいても、地上絵が発する強力なエネルギーを受け取ることが出来たのだという。

ただし、先住民が自分たちの力で造ることの出来た地上絵は、動物の絵までが限界。数キロに達

する超巨大な幾何学模様は、当時、プレアデスやシリウスからやって来ていた宇宙人たちとの共同作業で造られたもので、それらは宇宙船にエネルギーを補給するのに利用されていたようである。

製作の目的やその作り方が謎に包まれていたナスカの地上絵も、こうした考えを取り入れると、その謎がしだいに解けてくる。学者たちには荒唐無稽な話に聞こえるであろうが、真実を求める人間にとっては、学者たちの説く「地下水のある場所」を示すためのものだとか、「鼓笛隊が笛を吹いて歩くための道筋」だとかいう話より、はるかに納得感のある説である。

現に、ナスカに隣接したカラチ遺跡から発見されているピラミッド型神殿の建造年代は、残された焚き木の年代鑑定から、60000〜80000年前であることが確認されている。この事実は、ペトル・ホボット氏が語った8000年前の先住民による建造説が決して空言でないことを示している。

13年前に出版された本書の中では、残念ながら世界に散在するピラミッドやナスカの地上絵、マチュピチュの都市跡など、謎の遺跡群の正確な建造年代や建造目的などについては、不明な部分も残されているが、その後明らかにされたこれらの新たな情報を参考にして頂ければ、より歴史の真実が見えてくるに違いない。

著者としては、本書を最後まで読まれた後にもう一度この序文を読んで頂けたらと思っている。一人でも多くの読者に「人類史の真実」を知って頂き、正しい歴史観を持って頂くことを願って序文とさせていただきます。

ともはつよし社

謎多き惑星地球このほし（上）目次

序文……………2

プロローグ「古代遺跡探索への旅立ち」……………15

序章▼「ホピ族」……………18

I 「ホピの創造神話」を読む

第1章▼ホピの創造神話……………26

神話が語る「人類の歴史」／ホピの神話／「第一世界」の誕生と滅亡／「第二世界」の誕生と滅亡／「第三世界」の誕生と滅亡／「第四世界」の誕生

第2章▼「ホピの神話」が伝える人類の歴史……………42

人類の歴史は教科書とは違っていた！／ホピ族の長大な歴史／ホピの神話には、「先史文明」の知識が隠されていた！／「地底世界」は実在した！／世界中の神話が「ホピの神話」と同じ内容を伝えている／世界中に残された「洪水神話」

II ペルー探索

第3章▼ナスカの地上絵……………64

セスナから地上絵を眺める／地上絵の発見／どのように描いたのか？／何のために描いたのだろうか？／誰が、いつ描いたのか？／謎を解くキーワード／超巨大図形が示す先史文明の存在

第4章▼インカ帝国の首都クスコ……………97

リマからクスコへ／太陽の神殿（コリカンチャ）／クスコの地下を走る「謎のトンネル」／エクアドルで発見された巨大な地下室／アンデスに掘られた地下トンネル／サクサイワマン城塞／インカには一万年を超す歴史があった！

第5章▼謎の空中都市「マチュピチュ」……………128

クスコからマチュピチュへ／ハイラム・ビンガムによる「マチュピチュ」発見／謎の空中都市「マチュピチュ」／失われた都市「ピトコス」／マチュピチュの正体は？／「高さ」と「インティ・ファタナ」が解き明かすマチュピチュの秘密／臨死体験者が垣間見た「マチュピチュ」

第6章▼再びペルーへ 臨死体験を検証する……………152

オリャンタイタンボ遺跡／再び「マチュピチュ」に立つ／ワイナピチュ山頂に残された先史文明の痕跡／恐ろしい幻想

第7章▼ティアワナコ遺跡……………173

ポリビアへ入る／アカパナ・ピラミッドの秘密／半地下神殿は国際会議場だった？／太陽の観測所「カラササヤ」／巨石をつなぐスーパー合金の秘密／一万二〇〇〇年以前に建てられた「太陽の門」／一つの仮説「大カタストロフィー」後に再興されたティアワナコ文明／アンデス山中に見た大カタストロフィーの痕跡

III エジプト探索

第8章▼謎を秘めたギザ台地……………200

ギザ台地に立つ／大ピラミッドを眺める／大ピラミッドは、本当に「二〇〇年の歳月と一〇万人の労働者」によって造られたのか？／王墓説を裏付けるものは何一つ発見されていない

第9章▼大ピラミッドの内部……………224

大ピラミッドに入る／巨大な機械装置を彷彿させる「大回廊」／女王の間／王の間／謎の石棺／石棺が語る先史文明の「ハイテクノロジー」／「重力軽減の間」に隠された秘密

第10章▼大ピラミッドの秘密……………253

第二ピラミッドと葬祭殿／大ピラミッドに秘められた、長さと方位と水平度の驚異的な精度／NHKテレビが取り上げた「ピラミッド公共事業説」は本当か？／地球の姿が投影された「地球縮尺投影説」／日本のトップゼネコンが立案した「ピラミッド建造計画」

第11章▼神々によって建てられた「大ピラミッド」……………287

ピラミッドの建造年代を探る新たな手懸かり／「インペントリー石碑」が語る、ピラミッドとスフィンクスの起源

第12章▼スフィンクスの謎……………304

大スフィンクスと河岸神殿・スフィンクス神殿／スフィンクスの建造者をカフラー王とする根拠／「カフ」は、本当に「カフラー王」を指しているのか？／スフィンクスの顔は、カフラー王の模写ではなかった／エジプト学会を震撼させたロバート・シヨック博士の「雨水説」／河岸神殿も一万年以上前に建造されていた！／スフィンクスの建造年代を探るグラハム・ハンコックの考察

第13章▼始まりの時はいつだったのか？「私の立てた一つの仮説」……………334

ギザ台地の建造物は大カタストロフィー後に造られた！／再興文明を滅亡させた大激震／再興文明のその後／「神々の時代」それは洪水前の「先史文明」だった！

ともはつよし社

この書を、希有な臨死体験で先史文明崩壊の情景を垣間見、再びこの世に生還した、

スウィフト・タートル・キウチ彗星の発見者木内鶴彦氏と、

多難な明日と輝くばかりの未来を生き抜くことになるであろう、多くの幼い子供たちを代表して、
孫の勇人に捧げる。

プロローグ「古代遺跡探索への旅立ち」

私のライフワークは、「UFO」と「霊的世界」と「超古代世界」の探求である。先に『霊性の目覚め』を書きあげてから、はや八年の歳月が過ぎた。

その間、先史文明に対する思いは募るばかりであったが、世界中の遺跡巡りを必要とする「超古代世界」の探索は、勤めを持つ身では易々と叶えられることではなかった。

その間にも、遙かな太古の時代に、今日の文明に匹敵する先史文明が存在したことを示す、確かな証が^{あかし}続々と発見されていた。それらはみな、人類の歴史が教科書で教えているように、エジプト、メソポタミア、インダス、黄河の四大文明を祖とするものでないことを明確に物語っている。にもかかわらず、考古学者や歴史学者は未だに先史文明の存在を否定し、従来の歴史観にこだわり続けている。

そのような折りに出会った二冊の本、『ホピ 宇宙からの聖書』と『ホピ 神との契約』は、実に衝撃的であった。そこには、「ホピの神話」と「ホピの預言」が伝える人類の失われた過去の

「三つの文明」の存在と、近未来社会の戦慄的な預言が語られていたからである。

もし、「ホピの神話」が説くように、過去のいくつかの先史文明の存在が歴史的な「事実」であるとしたら、人類は学者が唱えるような右肩上がりの歴史ではなく、ジグザグの歴史、つまり「発展」と「滅亡」の繰り返しの歴史を歩んできていることになる。それは取りも直さず、現代文明終焉しゆうえんの到来が、決して空ごとでないことを暗示している。

翻ひるがえって、昨今の「世情」を眺めたとき、民族や宗教間に横たわる憎悪の念はしだいにエスカレート。強大な戦力と経済力を楯たてにした大国（マジョリティー国家）と、貧困にあえぐ弱小国（マイノリティー国家）との溝みぞも深まるばかりで、それらは「民族戦争」や「テロ」として、新たな争いの火種となっている。

また、アメリカの二酸化炭素削減に関する京都議定書への調印拒否に見られるように、自国の経済優先の前には環境問題など二次とする、エゴ丸出しの大国の論理がまかり通ってしまうという現実。こうした状況を目の当たりにするにつけ、全地球的な環境破壊に本当にストップがかかるのか、不安は増すばかりである。

他方、「心の世界」に目を向けると、物質的な豊かさや刹那せつな的な快楽を求めあまり、命の尊さや他人に対する思いやり、慈しみいっくといった心の豊かさが人の心から急速に失われ、連日マスコミを賑わせている獣と化した人々の行為は、もはや目に余るほどである。

このような風潮を見たとき、我々もまた過去の文明と同様、一つの文明の終焉しゆうえんの淵ふちに立たされて

いるのではなからうかと、不安にかられずにはいられない。

そのような思いが私をして、先史文明の存在を明らかにするために、古代遺跡探索へと旅立たせるところとなったしだいである。そして、その後の足かけ三年にわたる困難な長旅を支え続けたのは、多くの人々に「歴史の真実」を知っていただくという一途な^{いちぢず}思いと、「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」の人生訓であった。

本書は、学術的な研究論文でもなければ、遺跡探索の専門書でもない。世界中に残された多くの遺跡や、発見物、伝承を私なりに探求する中から、先史文明の存在を検証し人類の近未来を占ったものである。

読者の皆さんには、時空を旅する気軽さで、謎と不思議に満ちた過去と未来を探索していただければ幸いである。その結果、新たな歴史観と価値観が生まれ、混迷を深める今日の世界を生き抜く上での「よすが」となっていただけなら、それは、私にとって望外の喜びとするところである。